様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０３１３５

研究課題名（和文）「グループの力」を活用した大学の自殺予防体制の構築と普及

研究課題名（英文）A construction and dissemination of suicide prevention systems on campus using " group activities"

研究代表者
杉岡　正典（sugioka, masnaori）

名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・准教授

研究者番号：７０５２３３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では，大学の危機対応事例分析と学生相談機関におけるグループ活動を実践・分析することで，「グループの力」の観点から，孤立した学生の支援や自殺予防について検討した。事例分析の結果，①大学の一員として学生の近いところから危機介入を行うこと，②危機時にあっても成長発達的側面を重視すること，③事後対応における組織的対応の重要性が明らかになった。
　次に生きにくさを抱える学生に対し，3年間のグループ活動を実施した。その結果，①遊びの場だからこそ「人への関心」の芽生えること，②大人に見守られながら対人探求することの意義，③「変化を求めない」遊び的な関わりと場所の重要性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学生の自殺予防には，現代学生の心理特徴に応じた支援，並びに，修学や就職などの大学生活に密接した問題への支援といった心理社会的・教育的要因へのアプローチが不可欠である。また，大学で孤立し，居場所を失っている学生のなかには，個別心理療法には適さないものも少なくない。その点，本研究は，生きにくさを抱える学生が関わりやすい場や支援法（グループアプローチ）を考案し，その成長促進的な要因を明らかにした。そのことで，今後の学生の孤立・自殺問題に対して汎用性の高いアプローチが展開されることが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This study examined support for isolated students and suicide prevention from the perspective of group activity by analyzing case studies and practicing and analyzing group activities at student counseling center. The case analysis revealed the importance of (1) crisis intervention from a close distance to students as a member of the university, (2) emphasizing growth and developmental aspects even in times of crisis, and (3) organizational response in the aftermath.
　Next, we conducted group activities for three years for students with difficulties in life. As a result, it became clear that (1) it is in a playground that "interest in people" can grow, (2) the significance of interpersonal exploration while being watched over by adults, and (3) the importance of a playful relationship and place that "does not demand change.

研究分野：臨床心理学

キーワード：学生相談　孤独・自殺予防　グループ活動

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）大学生の自殺予防における心理社会的側面へのアプローチ

わが国の自殺率をみると，大学生をはじめとした若年層の自殺率のみが低下しておらず，依然として自殺が大学生の死因の第 1 位である。自殺研究の動向として，自殺背景には生物学的要因（うつ病などの精神疾患）が想定されている。しかし大学生の自殺予防には，疾患へのアプローチだけではなく，現代学生の心理特徴に応じた支援，並びに，修学や就職などの大学生活に密接した問題への支援といった心理社会的・教育的要因へのアプローチが不可欠である。

（2）現代学生と孤立の問題

高石（2009）によると，昨今の大学では「内面を語れない学生」や「巣立てない学生」が増加している。このような特徴を持つ学生は，大学で孤立し，居場所を失っていることも多い。修学や就職といった現実課題に挫折すると，時に自殺の危機にまで陥ってしまう。また，コミュニケーション能力が十分に発達しておらず，専門家との１対１の対話による面接が不向きなことも多い。このような学生の自殺予防や心の発達支援を促すためには，学生間の対人相互交流を促し，学内の孤立を防ぐグループ活動による支援の有用性を検討する必要があると思われる。

（3）学生相談機関におけるグループ活動の可能性

桐山（2008）は、学生相談におけるグループ活動の役割を「生身の人間関係の中に身を投じる練習の場」という点から論じたが、現在においても人間関係を実体験できるグループ活動を必要とする学生は少なくない。学生相談機関の実施するグループ活動では，通常，心理教育プログラムを実施してコミュニケーションの練習を行ったり、ワークやアクティビティを介して参加者の自己理解や対人交流を促したりすることが多い（例えば、屋宮，2008）。これらの活動が学生の適応を促進することは多くの研究蓄積がある。しかし，支援者が適応促進的な目的を前面に出せば、不適応感の強い学生は息苦しさを感じるかもしれない。また、活動のなかで親密な対人交流を求めれば、対人関係に参与する準備の整っていない学生は参加しづらくなる。そこで，孤立している学生を掬い上げ，彼らの孤立を改善するためには，大学適応の改善や対人スキルの獲得といった短期的、適応促進的な目標に拘らず，「遊び」を中心にした「グループの力」を活用したグループ活動の意義について検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究では，学生相談機関におけるグループ活動を実践・分析することで，「グループの力」の観点から，孤立した学生の支援，及び，大学の自殺予防について検討することを目的とする。

３．研究の方法

（1）大学生の自殺問題を分析するため，自殺関連事例，危機対応事例を分析した。

（2）学生相談におけるグループ活動の特徴と効果を検証するため，特徴の異なる 3 つのグループ活動（引きこもり学生対象、就職困難学生対象、低コミュニケーション学生）を継続して実施・分析した。

（3）グループ体験の意味づけや本活動で生じた対人関係の特徴を検討するため，参加学生へのインタビュー調査を実施した。

４．研究成果

（１）事例分析による学生相談危機対応の特徴

１）大学成員の一人として支援すること

Caplan(1961)に始まる危機介入の理論や実践では，危機に直面している個人やコミュニティに対し外部から見立て介入することが想定されているが，学生相談では「大学コミュニティの一員」として，組織の内部から心理支援を行うのが特徴であることが，事例分析から明らかになった。学生相談カウンセラーは，支援対象者である学生の近くに位置し，他の教職員と共通の教育目標を共有しながら，危機支援を行う心理臨床家としての専門性を発揮していく。このことによって，カウンセラーは，危機にある学生やコミュニティへ迅速で直接的な心理的支援が行いやすい立場になっていた。また，危機が去った後の，中・長期的な関わりについても見通しやすくなった。例えば，もと交際相手からのストーカー被害に遭っている学生に対し，すぐに保護者や警察と連携しながら防犯を行い，学内では頻回の個別面接を実施することで安全を確かめることができた。また，危機が去ったあとも，本人の希望に応じて，対人関係や異性との付き合い方に関する本人の特徴を探求することもできた。

２）成長発達的側面を重視すること

従来から心理的な危機が個人やコミュニティに及ぼす影響については，否定的な側面と肯定的な側面の両面が指摘されてきた（山本，2000）。金子（2019）もこころの危機について概説する中で，心理的な危機状況は自己にとって危険な出来事であると同時に，それを乗り越える力を

育む人生の転機となりえると述べている。このような指摘は，学生相談における危機支援において極めて重要であることが窺えた。

学生相談カウンセラーは，このような危機の両側面を意識し，医療における診断基準にも目配せしながら，危機に潜在する発達促進的な側面を引き出していく姿勢が求められる。内野(2020)は大学の危機支援において，事態を沈静化するために「対処や処理のモード」で支援するのではなく，学生を教育し成長を支えることが危機支援の第一義であると述べている。学生相談カウンセラーは，学生が危機前の均衡状態へと戻るための支援を行うのではなく，回復プロセスにおいて何らかの発達的変化が生じるような支援を行うことが理想だと思われる。ただし，このような支援法は，実際の危機的な状況に直面するとなかなか難しい。危機が深刻さを増したり，事件性が出てきたりすると，当該学生だけでなく周囲の関係者にも不安や緊張が高まっていく場面も見られた。カウンセラーも例外ではなく，その緊迫した状況の中で何らかの判断を迫られる場合もあった。そのような時に，事態に“対処”するのではなく，いかに統合的な視野を持ち，柔軟な関わりを維持できるかが学生相談の専門性と言えそうである。

３）事後対応

学生の自殺が生じた場合，カウンセラーは情報確認を行いながら，危機状況のアセスメントを始めた（図1）。また，学生の所属する学部の教職員（学部長や担当教員など），関連する支援部署と積極的に連携し，対応チームを編成していった。この初動段階で，学生情報や自殺の状況，保護者，第一発見者，生前に親しかった学生といった関連する情報を正確に共有することが重要であることが明らかとなった。

さらに，対応チームのメンバーである教職員も混乱し，傷ついている場合があるため，カウンセラーはメンバーへの情緒的なサポートも同時に行っった。場合によっては，危機事態における学部内の役割や責任の所在が曖昧であったり，逆に，誰か一人に責任や負担が集中しすぎたりする場合があるため，カウンセラーは組織的な人間関係を見立てながら関わっていく必要があることも示唆された。

学生へのケア（緊急支援）では，学生の反応が把握できる程度の人数を対象にすること，分かっている事実はきちんと伝え，葬儀への参列や弔問などについて保護者の意向を知らせることが重要であった。保護者のなかには，自殺であることを周囲の学生に伝えることや弔問などに拒否感を示される場合もあり，その意向は尊重されるべきであろう。学生への心理教育では，スクリーニングとケアの観点から集団・個別の関わりを行い，いつでも支援が受けられることを伝え特別な配慮が必要と思われる学生には，カウンセラーから積極的に個別面接を呼びかけた。また，保護者も混乱されているため，カウンセラーが保護者のサポートやケアを行うこともあった。

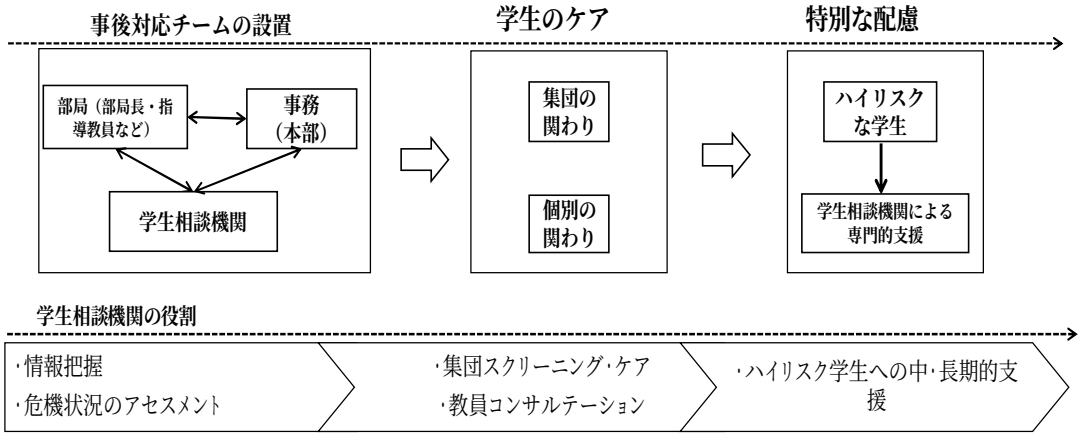

図1. 緊急対応の流れと学生相談機関の役割

（２）学生相談におけるグループ活動の特徴とその効果

１）ゲームを中心にしたグループ活動の概要

本研究では，引きこもり学生対象、就職困難学生対象，低コミュニケーション学生に対し，それぞれグループ活動による心理的支援を継続した。ここでは，ボードゲームを用いた活動（低コミュニケーション学生対象）に着目した。活動の実施回数と参加者数は表 1 の通りである。

表1. 活動の実施回数と学生の参加者数（低コミュニケーション学生）

	実施回数	のべ参加者数	実数（うち常連数）	1回平均人数
1年目	51	165	8(4)	3.2
2年目	48	186	16(7)	3.9
3年目	52	381	22(13)	7.3

２）活動のまとめ

３年間の活動経過を通して、一定数の学生が継続的に参加し、彼らの大学適応や心理発達に肯定的な変化が生じた。参与観察をするなかで、

参加者の目に見える対人交流は乏しかったが、多くの参加者は対戦相手とゲームの「駆け引き」をしていたことがうかがえた。また，対人交流の意欲そのものは増えなくとも、人への関心が芽生え、対人的な世界に開かれていく学生の姿がみられた。次に，学生の反応を「ゲームへの没頭」「メンバー間の交流」、「仲間意識の形成」「主体的行動の生起」の４つの観点からみると、学生は全活動を通して「ゲームへの没頭」がみられ、その過程で「メンバー間の交流」や「主体的行動の生起」を示す学生が限定的ではあったが増えていた。一方で、常連学生の間でも「仲間意識を形成」しているようには見えなかった。

表2. 主に使用したゲームの種類と活動の特徴

		1年目	2年目	3年目
主に使用したゲーム		対戦型：「カタン」「リスク」 協力型：「Scotland Yard」 パズル系：「ブロックス」「ギプフ」	対戦型：「カタン」「カルカソンヌ」「ウミガメの島」 協力型：「パンデミック」 パズル系：「ナンジャモンジャ」 推理・駆け引き系：「犯人は踊る」「ハゲタカのえじき」「花火」	
学生の反応	ゲームへの没頭	○	○	○
	メンバー間の交流	×	△	△
	仲間意識の形成	×	×	×
	主体的行動の生起	×	△	△
スタッフの反応	対等の立場で楽しむ	△	○	○
	真剣勝負	○	○	○

４）インタビュー調査からみたグループ体験と学生の変化

活動で生じた参加者の体験のあり様を明らかにするため、12 名の参加者に対し，半構造化面接を実施した。KJ 法による分析の結果,【参加の動機】【継続できた要因】【自己にまつわる体験・気づき】【メンバーにまつわる体験・気づき】【スタッフにまつわる体験・気づき】の計５つの大カテゴリが生成され、合計 31 の小カテゴリ〔　〕が作られた（表３）。

５）「グループに力」を活用した学生の成長，孤立・自殺対策への示唆

①　遊びの場で生じる「人への関心」の芽生え

参加者は普段の大学生活から隠れ、不登校傾向にあったが、グループ活動には「遊びに来る」ことができた。ゲーム遊びであるから授業のような評価はなく、互いの素性も知らされず、継続的な対人交流も要求されない。実際の経過の中でも、多くの学生がゲームに没頭し、黙々とプレイを続けていた。しかし、ゲーム遊びの興味深いところは、一見すると自閉的で非交流であるかのように思われる事象が極めて対人的な状況を創造し、参加者の関心や意図とは関わりなく、対人的相互作用を生起させうることである。対戦ゲームでは、（少なくとも）自分のターンが回ってくれば何らかの一手を打つ必要があった。そして、その自分の一手が他のプレイヤーやゲーム展開に直接的な影響を及ぼすことが体感できる。それと同時に、対戦相手も戦略を練っていることが感じられ、相手の一手で自らのゲーム運びに大きな影響を受ける。このようなゲームにおける相互のやりとりは、参加者を「知らず知らず」のうちに対人的な状況に誘い込み、その状況に「主体的」に関与させていた。「ゲームの会」が参加者の「人への関心」を育み、主体的行動の形成に役立ったとすれば、ゲーム遊びには対話とは異なる様式で、即興性のある対人的な相互作用を生み出す仕掛けがあったことが１つの要因だったと思われた。

②　大人に見守られながら対人探求すること

スタッフは支援者として学生を見守り、居場所提供の配慮を行った。スタッフと個別面接関係のある学生も参加していた。スタッフは学生に対し信頼感や安心感を提供しやすい立場にあり、そのことが彼らの変化に大きな影響を与えたと思われる。スタッフの見守りとゲーム遊びという「二重の守り」のなかで、学生たちは手探りの対人探索を始めたのであろう。それと同時に、真剣勝負でゲームをするスタッフの関わりは、従来の「カウンセラー的な姿勢」をはみ出し、スタッフの「素」の側面を映し出すものでもあった。経過のなかでスタッフはゲームの世界に熱中し、勝ち負けに伴う率直な感情や感想を表明した。また、負けが続く学生に慰めの言葉をかけることもあれば、自分が勝つために意地悪なプレイをすることもあった。面接調査では、スタッフに対して〔一緒にプレイする親近感〕を語る学生がいたが、本活動で生じた関係性は、カウンセラーと学生、支援者と被支援者といった役割関係を超え、より「生身の関係」に近づくものであった。加えて、本活動に参加した事務職員の率直でいきいきとした遊び方は印象深く、彼らが普段大学でみせる姿とは明らかに異なっていた。経過中に、ある学生が事務職員のプレイスタイルに関心を示す場面がみられたが、学生は（そして支援者も）対戦相手の意外な一面を発見したの

表3. 活動の体験内容のカテゴリと該当人数（低コミュニケーション学生）

大カテゴリ	小カテゴリ
参加の動議	人付き合いが苦手で話す人がいない(9名)
	ただ大学に来る習慣をつけたい（5名）
	人間関係を改善し広げたいから（4名）
	他にすることがないから（3名）
	ゲームが好きだから（２名）
継続できた要因	授業のような評価がない（8名）
	対話をしなくてもよい（８名）
	自由参加（7名）
	匿名性がある（6名）
	ゲームが楽しい（6名）
	その場限りの関係（5名）
	活動が毎週実施される（2名）
自己にまつわる体験・気づき	勝負・戦略の面白さ（10名）
	自信がついた（7名）
	勝敗による嬉しさや悔しさ（5名）
	人とゲームすることの新鮮さ（5名）
	人付き合いの苦手さは変わらない（4名）
	メンバーを見て自分の特徴に気づく（４名）
	ゲームに負ける不安・緊張（2名）
	勝負に疲れる（1名）
メンバーにまつわる体験・気づき	会話が苦手なもの同士の安心感（6名）
	メンバーのゲーム戦略が参考になる（５名）
	ゲームからメンバーの性格・価値観を推し量る（４名）
	メンバーの口数が少なく物足りない（3名）
	もっとメンバーと仲良くなりたかった（3名）
	知らない人とゲームをする不安（2名）
	メンバーに関心がない（2名）
スタッフにまつわる体験・気づき	一緒にプレイする親近感（7名）
	スムーズにまとめてくれる（5名）
	スタッフの発言や振る舞いを観察して学んだ（2名）

だと思われる。これらの点から推測すると、学生たちは自分と一緒になって夢中にゲームを楽しむ大人との関わりから、人間の意外性や多面性を体験したのかもしれない。もちろん、学生たちはスタッフがカウンセラーや事務職員であることを知っていたが、そのような役割をもった「大人」であるはずのスタッフが「大人でない部分」を楽しんでいることを発見することは、彼らの対人認識を揺さぶり、他者へ関心を向ける機会の１つになったと思われる。ともにゲームをする親近感と、そこに立ち現れる他者の独自性の両方に触れる新鮮な体験が、学生の変化を後押しした可能性が示唆された。

③「変化を求めない」遊び的な関わりと場所の重要性

対人関係から引きこもる学生は大学適応の改善や対人スキルの獲得といった周囲の大人が向ける「公的な」期待や眼差しに傷つき、その援助から逃れようとする場合がある。その点を踏まえると、本活動は学生支援という教育的環境のなかで実施し、かつ、公的な変化を第一義的に求めない場や関わりを提供したからこそ、対人交流に意欲的でない学生を掬い上げ、彼らに「主体的な変化」が生じる余白としての自由と、安心感のある対人的な刺激を与えたことが示唆された。

学生のなかには，周囲から変化を求められること，大人からケアや支援の対象と目されることに対する不安や抵抗感が強い場合がある。今後，大学における学生の孤立や自殺への対策を考える際には，多様な自殺対策や学生支援の一環として，見守りながら遊びが生まれる場所を創出し，学生に「あるべき学生の姿」を求めない関わりを模索することが重要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山内星子・松本真理子・織田万美子・松本寿弥・杉岡正典・鈴木健一	４．巻 20（1）
２．論文標題 大学における新型コロナウイルス感染症流行下の学生支援実践と今後の課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校心理学研究	６．最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 杉岡正典	４．巻 ３６（７）
２．論文標題 言語面接と箱庭制作が収斂した学生相談の展開過程　‐非言語媒介の可能性‐	５．発行年 2020年
３．雑誌名 心理臨床学研究	６．最初と最後の頁 ５２５－５３６
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木健一・杉岡正典・堀田亮・織田万美子・山内星子・林潤一郎	４．巻 39（3）
２．論文標題 2018年度学生相談機関に関する調査報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 学生相談研究	６．最初と最後の頁 215-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大塚尚・穴水幸子・勝又陽太郎・榎本眞理子・藤原祥子・伊藤理沙・古川真由美・杉岡正典・高野明	４．巻 26
２．論文標題 現代の青年が経験する自他の希死念慮に関する基礎調査	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京大学学生相談所紀要	６．最初と最後の頁 265‐279
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 山内星子・杉岡正典・鈴木健一・松本寿弥・織田万美子・松本真理子
２．発表標題 コロナ禍における学部新入生の心理的適応-入学時と入学後半年時の縦断的調査から
３．学会等名 日本学生相談学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 織田万美子・松本寿弥・堀田亮・川上ちひろ・鈴木健一・杉岡正典・山内星子・松本真理子
２．発表標題 ２大学協働のオンライングループセミナーの実践（２）
３．学会等名 日本学生相談学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小橋 亮介・杉岡 正典・山内 星子・松本 寿弥・織田 万美子・鈴木 健一・松本 真理子
２．発表標題 コロナ禍における大学生の心理的適応とその関連要因
３．学会等名 学校心理学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 今村七菜子・鈴木健一・杉岡正典
２．発表標題 一研究室から研究所内へと活動を広げたカウンセラーの実践とその効果
３．学会等名 日本学生相談学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 松本寿弥・山内星子・杉岡正典・鈴木健一・松本真理子
２．発表標題 学生と教員の心理的特性および適応－教員へのコンサルテーションのための基礎的な資料の検討－
３．学会等名 日本学生相談学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Masanori Sugioka
２．発表標題 Student Counseling Activities Using Board Games for Maladjusted College Students in Japanese Universities
３．学会等名 EUROPEAN CONFERENCE ON DEVELOPMENTAL PSYCHOLOGY　（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kobashi, R., Yamauchi, H., Sugioka, M., Suzuki, K., & Matsumoto, M.
２．発表標題 Present status and problems related to the clinical psychological support provided in a student counseling center in Japan (1): An analysis of sixteen years’ statistics
３．学会等名 Conference of the International School Psychology Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamauchi, H., Sugioka, M., Kobashi, R., Suzuki, K., & Matsumoto, M.
２．発表標題 Present status and problems related to clinical psychological support provided in a student counseling center in Japan (2): An analysis focusing on support for parents and staff
３．学会等名 Conference of the International School Psychology Association（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

1．著者名 杉岡正典	4．発行年 2022年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 16
3．書名 大学コミュニティの危機支援	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　健一 (suzuki kenichi) (10284142)	名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授 (13901)	
研究分担者	堀田　亮 (horita ryou) (10733074)	岐阜大学・保健管理センター・准教授 (13701)	
研究分担者	古橋　忠晃 (furuhashi tadaaki) (50402384)	名古屋大学・総合保健体育科学センター・准教授 (13901)	
研究分担者	船津　静代 (funatu shizuyo) (90345877)	名古屋大学・学生支援センター・准教授 (13901)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関